

検察改革の決め手にスポット

大阪地検大島次席と渡真利の仲を裂け

〈前検事総長の笠間治雄氏も小津博司新検事総長も、検察の改革はいまだ不十分で、なんとか改革の糸口を掴みたいとの思いが伝わってくるではないか。この検事総長の謙虚さと、検事や検察事務官の思いが一つになれば検察の改革は必ずや実現できるはずだ〉

これは、先(8)月号本紙



暴力団・渡真利



大島・大阪地検次席

からの抜粋である。

検察内部からの検察改革を切望する声は、本紙川上の心の耳には悲痛なまでの叫び声のようにも聞こえる。何とかしなければ。内部からの改革が無理なら、せめて外部から改革の火種だけでも提供しようではないか。

とにかく一度、こちらあたりで、平成14年4月22日の三井環大阪高検公安部長の冤罪逮捕を総括することである。

先輩の原田明夫検事総長が、調査活動費から裏金作りの発覚を恐れて、口封じのために三井逮捕に踏み切ったことを総括すべきである。なぜなら、それが検察改革の糸口になるからだ。

まず、押さえるべきはここだ。

要するに検察は、暴力団渡

真利の協力を得て三井逮捕を実現し、公判でも渡真利の偽証のおかげで三井元公安部長を刑務所に送り込めた。実際、贈賄役を引き受けてくれた渡真利の拘置所に、当時の大島公判検事が40回余りも通ってうその証言を求めていたのである。渡真利の役割は三井環氏を刑務所に送りこむことで、当時、直接対話して協力をした大島公判検事には絶対的な貸しができたということだ。

そうなれば、現在の大島大阪地検次席は暴力団渡真利の無理難題の頼み事でも受けざるを得ないという立場ではないか。改革を成功させるには、暴力団渡真利との貸し借りを曝して、検察の弱みをなくすことだ。頑張れ検察。今だ！

平成24年9月5日 四国タイムズ